

## はじめに

このアンケート調査報告書は、東京女子大学が80年の歴史の、最初の30年間に送り出した卒業生約2,000人を対象に、1996年に行なったアンケートの集計結果である。このアンケートがさまざまな質問項目への回答を通して浮かび上がらせようとしたものは、本学の教育の在り方が、学生たちにどのように受け取られていたか、卒業後の人生にどのように生かされたか、である。対象とした「最初の30年間」とは、創立の1918年から1948年までの旧学制時代、すなわち女子には男子に比べて限られた教育機会しか認められていなかった時代である。また、女性の生き方についての社会全体の認識も、現代とは大きく異なる時代であった。

対象を初期の卒業生とした理由は、このアンケート調査の実施に至る経緯にある。1998年4月に、東京女子大学創立80周年記念事業の一つとして、『旅人われら—東京女子大学の卒業生たち—』と題する冊子が出版された。それは、1918年から1948年までにこの大学で学び、巣立って行った卒業生にインタビューし、50名分をまとめたものである。卒業生の生き方の中に建学の精神を探り、東京女子大学の進むべきこれからの方向を見い出そうとするものであった。

本アンケート調査は『旅人われら』刊行の過程で、二つの目的のために計画された。一つは、アンケートの回答者の中からインタビューの対象者を見つけ出すこと、もう一つは、実施に伴うさまざまな制約によって限られた人数とならざるを得ないインタビューを補完して、その時代の卒業生の全体像を把握することである。従って『旅人われら』と本報告書は対をなすものである。

対象を初期の卒業生としたことの意義は、創立当時、あるいは創立に近い時期の本学がどのようなであったかを、今ならまだ、実際に体験した人から直接知ることができる点にある。また、卒業後何十年もの長い時間を経た後に、学生生活や大学教育の思い出として残るのは何かを聞いてこそ、どのような教育が人にとって本当に価値のあるものなのかを知ることができる点にもある。

調査票は自由記述の箇所が多かった。それにもかかわらず、特に自由記述の項は、人それぞれの実にさまざまな言葉で書かれていて、中には細かな文字で裏までびっしりと書かれたものさえあり、紙面から個々人の思いの強さが伝わってくるようであった。ことに高齢者による熱心な記入はこのアンケートの目的の一つに叶うものであった。これらはそのまま、東京女子大学の歴史と将来を考える際の貴重な資料となるだろう。

本報告書では、本文に回答を分類・集計した結果を載せ、巻末に記述5項目への記載を21名分、各時代の雰囲気や特徴をよく伝えていると感じるものを、ほとんど原文のまま添付した。

なお、本アンケートは、『旅人われら—東京女子大学の卒業生たち—』に参加した卒業生教職員有志によって企画・検討され、作成された。回収後の作業に当たっては、集計は主に小口・若松が担当し、下記のメンバーで内容の検討を行なった。

最後に、誠実に回答を寄せてくださった方々に改めて心からお礼を申し上げる。

1999年3月

井上 早苗 (文理学部教授)  
小口 菜採 (文理学部助手)  
栗原佐和子 (『旅人われら』編集メンバー)  
眞田 雅子 (現代文化学部教授)  
三宅 文子 (前『学報』編集者)  
若松 素子 (文理学部助手)

(五十音順)